

生きのびるためのジェンダースタディ

女子大学で実践すること、その意義

寄 藤 晶 子

本稿では、福岡女学院大学の基盤教育科目「ジェンダースタディ C」の初年度における授業実践を紹介し、“女性が生きのびるためのジェンダースタディ”が女子大学には必要であることを主張する。

1. はじめに

福岡女学院大学「ジェンダースタディ C」は基盤教育科目である。基盤教育とは学部学科を横断して設置された全学的領域で、本学に入学した学生全員に学んで欲しい科目群を統合している。この全学的な教育領域に設けられた“社会的性差を考える科目”に何ができるか。何をどう扱ったらよいか。多様な学生たちが学科の専門性を越えて“わざわざ”受講する科目として、筆者に提供できることがあるとすれば、それは一体何か。担当が決まってからの一年半、授業の内容や組み立てを模索する日々が続いた¹。

本稿では、「ジェンダースタディ C」の準備段階における考えの変遷と、2023年度に初めて実施した授業内容を紹介し、“女性が命をつなぎ、生きのびるためのジェンダースタディ”の必要性と、これを実践できる女子大学という場の重要性について述べてみたい。

2. 授業計画ができるまで

これまでの筆者の授業では概念の教科書的理解を出発点としながら、文学

作品や漫画、国内外の映画やドラマ、ドキュメンタリー番組や統計データを用いて、「女はこうあるべき」「男はこうあるべき」といったジェンダーに関する決めつけの様々な形や、それによる不利益、不条理、生きにくさを考え、それらをはね除けていく強さや言葉を獲得しようと試みてきた。

小説そのものに現実を変える力はないものの、文学を通した時空を超える出会いは悲しみも喜びも分かち合う感情となって、私たちが世界を変える一歩になる（岡 2008）。毎週 90 分の文学体験は、参加者ひとりひとりの経験が世界の女性と繋がりあう感覚を教室にもたらした。読書により獲得したことばは、からだの奥底深く秘められていたものがその人のちからとして噴き出すことを手助けし、自立と闘争の盾となる（大沢 2003：100）²。だからこそ、ジェンダーの授業での文学体験は、自分らしく生きる手がかりと自信を手に入れる根を育てることができる。学生たちは自らの日常と世界の女性の経験を触れ合わせながら、ジェンダーにまつわる様々な理不尽に言葉を与え、言語化によって自分と仲間を守れる強さを手に入れてきた³。

毎週の受講票には、学生がぶつかり見聞きしてきた苦難や喜びが溢れた。「自分は経験せずに済んで幸せだ」という他人事の感想を書いていた学生は、回が進むにつれ誰かの苦難を想像する主体に育っていく。こうして受講生皆が「女性各自が自己の経験を顕在化し、その視座を彫琢していく作業をとおして自己に自信をもち、自己を主張し表現できるようになっていく」（井上 2021：275）。そのようなエンパワーメントを目指してきた。

このようなこれまでの授業の意義を振り返りつつも、“幸せそうな女が憎い”という敵意と暴力に直面した時⁴、何ができるだろうかと悩まずにはいられない。学生たちの体と心を守る術を身につけることも“自立と闘争の盾”として女性に必要なのではないのかと。

痴漢やセクハラなどの性暴力において、被害者には何の落ち度もないことを伝え、社会にはびこり自分の内側にもある無自覚な強姦神話への気づきを促し、回復に向けた言語化の力を一緒に蓄える、これで十分だろうか。何より私自身が被害／加害の当事者あるいは遭遇者となったとき、どうすれば事態の悪化を回避できるのか。女子大学の基盤教育として学生の体と心を直接

守るジェンダースタディを作ることはできないか。コロナ禍で噴出した女性の困難の前に、強く考えるようになった。

敵意や暴力にさらされると感じる「その時」どうやって逃げ、どこに助けを求めれば良いか。虐待から逃れ、あるいは自分が虐待者にもならないために、取れる行動はいかなるものか。身体・筋力差のある男性に怯えることなく堂々と意見を述べることができる女子大学という環境、ここでこそ実践できる「命をつなぐための、生きのびるためのジェンダースタディ」をすべきではないか。女性宣教師による女子教育の長い歴史を持つ福岡女学院において、学生たちの生を支えることのできるジェンダースタディをできないだろうか。

3. 「ジェンダースタディ C」全 15 回の概要と授業の様子

基盤教育としてのジェンダースタディに必要なのは、まさに今、女子学生の命をつなぐ学びではないか。2022 年 12 月に提出したシラバスには次のように記した。

ジェンダー概念やジェンダーに基づく暴力について理解し、自分や知人が暴力に直面した際に命を守り、被害者を間接的に支えることのできる技術や知識を習得します。ジェンダーに関する座学を踏まえて、救急救命や女性向け護身術の基礎を習得します。公的機関やDV被害者支援団体にもお話を聞き、何かあった際の相談窓口体制や、アクセスにおいて必要となる知識を得ます。自分を守り、他者を支える知識と技術を習得し、弱者に対する暴力の予防や被害者支援制度へのフィードバックも目指します。

誰もが危険を感じずに生きられる社会の実現に向けて知識を獲得し、一緒に考えていきましょう。

(2023年度後期、基盤教育：ジェンダースタディC、寄藤シラバスより転載)

この講義最大の特徴は、女性向け護身術、救命救急、ストーカーや性暴力の相談先について、実際に現場で職責を果たすゲストを招き、直接学ぶ機会を設けたことにある。流れとしては、序盤に世界で話題となった論調を紹介し、なぜ今ジェンダーが問題なのかという問いを投げかけながら、概念や諸問題を整理し、暴力に関する世界の状況を取り上げた。筆者がこれまでの授

業で積み上げてきた文学体験を通したエンパワーメント、すなわち性差別の生きにくさに言葉を与え、はね除ける強きを得ることも引き続き強く意識し実践した⁵。その上で女性向け護身術の実技（第5回）、救命救急の実践と心得（第7回）、ストーカー対策の制度とアクセス（第9回）、性暴力被害者支援の実際と制度の活用（第11・12回）が来るように構成した（表1）。

表1. 授業の流れと構成

	授業の流れ (シラバスより)	実施した内容と使用教材(一部) (網かけはゲスト講師回)	* 学生 出席率
第1回	ガイダンス (この授業の進め方や、成績評価方法など)	授業の狙いと進め方、学生への課題説明 シラバスなど	94
第2回	ジェンダーとは何か	男女がもっと対等な社会を作れるはず。 アディーチェ (2014)、加藤 (2017) など	91
第3回	ジェンダーに関わる諸問題	女/男として押し付けられることについて。 わたしを支え応援する人がいたことについて。 IWAKAN編集部 (2023) など	92
第4回	Gender Based Violence ジェンダーに基づく暴力の国内外の状況	男性による経済的支配等を背景にフェミニサイドなど 世界中で女性が虐待される状況について。 独立行政法人国際協力機構 (2019)、アタネ他 (2018)	88
第5回	実技：危険から逃げる 女性向け護身術の思想と実践	Wen-Do Japanの福多唯代表によるオンライン授業 教室内で立ち上がり、ペアで護身術体験	90
第6回	「危険から逃げる」のふりかえり	危険に直面した際の逃げ方等、実技の復習 女性同士が助け合うことについて。 マチュー (2022) など	87
第7回	実技：命を守る 救命救急の実践と心得	福岡市消防局警防部救急課と南消防署の皆様による 救命救命講座 (心肺蘇生、AED、周囲への声かけなど)	84
第8回	「命を守る」のふりかえり	救命救急の復習	80
第9回	助けを求める ストーカー対策の公的制度和アクセス	福岡県警察本部生活安全部人身安全対策課による ストーカー対策の制度和アクセス	87
第10回	「助けを求める」のふりかえり	ストーカー事案をめぐる情勢の整理 被害者にも加害者にもならないためにできること	90
第11回	被害者を支える DV・性暴力被害者支援の実際と心得	(一社)女性と子どものエンパワメント研究所・石本宗子氏 DV・性暴力の状況、その原因と背景	79
第12回	被害者を支える 被害者支援の注意事項と制度の活用	(一社)女性と子どものエンパワメント研究所・石本宗子氏 DV・性暴力被害者対応の留意点	80
第13回	「被害者を支える」のふりかえり	プリントを用いた前週の要点整理 第1回から12回目までの総まとめ。 大沢 (2023) など	89
第14回	GBVへの対処と制度のこれから	強姦神話とバイアス 男性被害者の声の上げにくさと制度のこれからについて	84
第15回	期末テストと解説	期末テストと授業の総括、解説	99

* 履修放棄者を除く全受講者数より算出

護身術では、カナダ発祥の女性用護身術団体 **Wen-Do** の日本支部代表を招き、救命救急では福岡市消防局のご協力を賜った。事情によりオンラインでの実施となった護身術だったが、大教室で座席から立ち、実際に「絡まれた」状況を意識した逃げ方などを動きとともに全員で学習した。



消防局の回には南消防署の応援も受け、総勢 10 名以上の消防職員が教室を見回って心肺蘇生などの実技を指導した。市民の寄付によって 100 台以上が用意された訓練用 AED 簡易キットは、受講生全員が一台ずつ使用でき、扱い方を繰り返し学習す

ることができた(写真)。今回、AED に初めて触れたと言う学生も多かった。

ストーキングを感じた際の相談窓口などについて学ぶ「ストーカー対策の公的制度とアクセス」の回には、福岡県警察本部生活安全部のご協力を賜った。女性講師を希望したところ、快く応じていただいた。性暴力被害者支援の実際、制度の活用と支援の心得に関する回では、一般社団法人「女性と子どものエンパワメント研究所」(S. ぱ〜ぷるリボン) の長年にわたる被害者支援に触れ、講義終了後の休み時間には、将来被害者支援に携わりたいという学生が講師に相談する場面もあった。

13 回目以降は全体総括をしながら、ジャーニーズ事務所の性加害問題のように見過ごされてきた男性被害を取り上げて、私たちひとりひとりの中にあるアンコンシャス・バイアス(無意識の偏見)や強姦神話への気づきを促した。支援制度へのアクセス方法を知り、制度を使いこなせなければ、この社会で制度は育たず、頼り甲斐のないままになる。先人が作り上げてきた支援体制の一端に触れることは、学生本人のみならず、その周囲の誰かや通りがかりの、あるいはこれから生まれる人の助けにもなる。あらためて男女平等の世界について考えてもらう形で全 15 回を終了した。

4. 学生が教えてくれること

本節では学生⁶のコメントを参考にして、“女性が生きのびるためのジェンダースタディ”の必要性和、これを実践できる女子大学という場の重要性について述べる。なお、コメントは個人の特定を防ぐよう注意し、類似の意見を統合して再構成してある。

4.1. 履修動機、目標

第1回の授業において履修した動機や目標をたずねたところ、授業内容を引用しつつ、暮らしの中での不安感に対峙したい、学びを通して強くなりたいたいという意見が多く見られた。

*最近怖いニュースが多くて不安を感じて生きているから、学んで少しでも強くなりたい。
*一人暮らしで、自分で身を守るしかないことを実感、少しでも強い女性になりたいから。
*知識があることで、安心して生活できると思ったから。など

また、自分だけではなく周囲の人の身を案じ、履修していない友人や家族にも働きかけたいという積極的な意見も目立った。教職やカウンセラーなど特定の仕事や、留学に活かしたいという意見には学科の専門性が表れた。

*友人が痴漢にあったと聞き、自分だけでなく周囲の人をサポートできるようになりたい。
*DVや性暴力で悩んでいる人の力になれるようになりたい。
*将来、学校教諭や心理学の仕事に携わる時に必要な知識を身につけられると思ったから。など

さらに、ジェンダーは中学から高校まで学習してきたとしつつ「いざ暴力に直面した時の対処をどうすれば良いかは全く知識がないため履修したかった」という趣旨のコメントもあった。これは、女性が実際に体験する犯罪とジェンダー教育のズレを示唆するものである。井上輝子の言う、日々刻々

に再生産される女性差別の解消に、ジェンダーの仕組みを一般的かつ抽象的に論じているだけでは不十分であり、個別具体的な問題に差別をなくそうとする立場から切り込んでいく必要がある（井上 2021：281）ということを改めて考えさせられる⁷。本講義「ジェンダースタディ C」は、まさにこうしたズレを乗り越えるものとして意義があると同時に、若年女性の不安感に向き合い、学生の生を支える上で重要な機会であると言える。

4.2. 達成感、女子大学という場への期待

全 15 回の授業とテストを終えたところで、学びの達成感などを受講生にたずねたところ、全受講者が当初掲げた自分の目標に近づけたと回答した。昔は言語化できなかった疑問が見えるようになり、アンテナを張れるようになったと言う学生。勇気を持って行動できるようになった学生。女性だからという理由で行動を制限せずに行きたい、毎回とても楽しかったとの意見。ジェンダーを学べてよかったという活き活きとした声は想像以上に多かった。

護身術については、折に触れて思い出している、備えながら通学しているというコメントや、一緒に受講した友人と休み時間に技（型）をやっているという声など、学生たちの日常の中に学びが浸透していた。帰宅後には母親や姉妹に、学内では未受講の友人に教えてあげたとの嬉しそうな報告も目立った。受講生が自分たちの生活世界において助けになると感じたからこそ、さまざまな場所で周囲の女性たちに伝え共有しようとする波が生まれていた。

*いざという時に、どう動けば良いのか考えられるようになった。
*怖い思いをした時、すべきことやできることが圧倒的に自分の中で増えた気がする。
*その場から「逃げる」ということも護身手段と知れて、この授業を受けてよかった。など

さらに、今回の取り組みは女子大学だからこそ可能だったのではないかと、学生のコメントがそれを教えてくれる。

*先生も学生も女性だから気兼ねなく考えをぶつけ、意見交換ができた。
*しっかり学べたのは女子大だったから。女学院に入学してよかった。
*女子大学だからこそその本場に大切な時間でした。

授業中に話題にした筆者自身の苦い思い出やゲスト講師の話は、年齢を超えて学生の日常へとつながっていき、それをきっかけに受講生同士が語りあう場を生み出した。女性の身体を持ち、“女の子”とまなざされた者が経験する大小さまざまな痛み。毎週の教室はその痛みを語っても良い場所であり、口に出さずともこれを互いに想像しあおうという優しさに満ちた場所ではなかったか。互いの痛みを耳をすませ、私たちに落ち度はないよ怖かったねと安心して口に出し、“私は悪くない”と信じきれぬ強さを手にしてくれたとすれば、それこそがこの授業最大の成果と言えよう。そして、これが女子学生だけの場所だったからこそ成立したと、学生たちが表明している事実は無視できない。女子大学だからこそ可能となる学びのあり方と、女子大学という環境の意義を改めて考えたい。

4.3. ゲスト講師

ゲスト講師として女性が多く登場したことを喜び、震える声で思いを語った学生もいた。依頼側が意識しない限り、実務系ゲスト講師は男性に偏りがちであるが、本学のような女性のための高等教育機関においては、女子学生のロールモデルとなる女性実務家をゲストにする努力が必要である。

世界経済フォーラムの男女の格差指数(GGGI)で日本は125位/世界146ヶ国(2023年)であり、特に政治と経済の分野での男女格差が大きい。ゲスト講師の男性偏重はこうした日本の男女格差の反映とも言えるが、科目運営者次第でジェンダーバランスは改善できる。女性の大学教員や決定権を持つ女性を目にする機会は、女子学生の進路イメージや自己肯定感に確実に影響することを、大学全体でさらに意識する必要があるだろう。実務系ゲスト講師の依頼段階で女性経営者や女性役職者の登壇を依頼する、あるいは登壇者の半数が女性となるように運用することは可能である。こうした取り組み

が日本の GGGI の改善と、私たち女子高等教育の役割となることで、女子学生を勇気づけられることを指摘しておきたい。

5. おわりに

女性であることを理由にした暴力が存在する以上、現実の敵意にさらされた際の対処方法を知り、学生たちが命をつなぎ生きのびる助けとなる知識や技術を獲得するジェンダースタディは必要である。

女性たちに教育を受ける努力をするように、そして自らの知的能力を伸ばすように導き、勇気づけることは、フェミニズム運動の主たる目標であるべきだとベル・フックスは訴えた (フックス 2017: 162)。本講義が、女子学生の命をつなぎ、生きのびる助けとなるだけでなく、性差別の痛みを抱えた全ての人への想像力を育み、男女ともによりよく生きられる社会を考える足場になることを願っている。福岡女学院大学基盤教育科目「ジェンダースタディ C」の取り組みは始まったばかりである。

注

- 1 筆者 (寄藤) は、2014 年に准教授として着任して以降、国内外の観光地理学系科目や地域・社会調査を行うゼミと卒論指導に加えて、ジェンダー関連科目を担当してきた。このことから、基盤教育科目の「ジェンダースタディ C」も拝命することとなった。事情により、2023 年 10 月からは非常勤講師として本講義を担当している。
- 2 横浜の寿町で 1980 年から被差別者の識字活動を続けてきた大沢敏郎は、文字を自分のものとすることによって人は生きかえるとした (大沢 2003)。
- 3 当時の授業について「今でも母と話題にすることがある」と卒業生が書簡で教えてくれたことがある。
- 4 2021 年 8 月 6 日、関東地方を運行する鉄道車内で、当時二十歳の女子大学生を含む乗客 4 人が 37 歳の男性に刃物で刺され重軽傷をおった事件が記憶に新しい。直接切りつけられた被害者 4 名中 3 名は女性であり、犯人が「勝ち組の女性を探した」と

報じられたことから、厳密には無差別ではなく「女性」を標的にしていたことが明らかになった(2021年9月22日毎日新聞東京版夕刊)。これは Gender Based Violence (頭文字をとって GBV と略される)、ジェンダーに基づく暴力に当てはまり、女性を狙っていることからフェミサイドとも位置付けられる。

5 授業中に紹介した書籍は福岡女学院大学図書館の特設コーナー「漫画 de ジェンダー展」に配架し、履修者以外の学生の目にも触れるようにした。また、那珂川市の男女共同参画センターにも 2023 年 12 月から一部を展示していただき、男女平等の取り組みを推進する市民団体に利用されている。

6 全学的な基盤教育科目であるため、3 学部 6 学科の学生が履修可能な水曜日 1 時間目(9 時 15 分開始)に本講義は配置された。授業途中の履修放棄者を除くと、人文学部の 3 学科から 13 名、国際キャリア学部の 2 学科から 21 名、人間関係学部から 58 名(全て心理学科)の計 92 名が受講した。

7 ベル・フックスも、性差別をなくし性差別的な搾取や抑圧をなくすというフェミニズムの理念が教育レベルの高い少数の人々にしか理解されないのであれば、大衆を基盤としたフェミニズム運動はありえない(フックス 2017: 158)と危機感を抱いている。

参考文献

イザベル・アタネ、キャロル・ブリュージェイユ、ウィルフリッド・ロー、土居佳代子 訳, 2018, 『地図とデータで見る女性の世界ハンドブック』原書房。

井上輝子, 2021, 『日本のフェミニズム—150 年の人と思想』有斐閣。

IWAKAN 編集部編, 2023, 『未来の男性へ—IWAKAN 書簡集』Creative Studio REING。

大沢敏郎, 2003, 『生きなおす、ことば 書くことのちから—横浜寿町から』太郎次郎社エディタス。

大沢真知子, 2023, 『「助けて」と言える社会—性暴力と男女不平等社会』西日本出版社。

岡真理, 2008, 『アラブ、祈りとしての文学』みすず書房。

加藤秀一, 2017, 『はじめてのジェンダー論』有斐閣。

チママンダ・ンゴズィ・アディーチェ, くぼたのぞみ訳, 2017, 『男も女もみんなフェミニストでなきゃ』河出書房新社。

独立行政法人 国際協力機構編, 2019, 「mundi」66 号。

トマ・マチュー, リボアル堀井なみの&コザ・アリーン訳, 2022, 『クロコダイル ワニみたいに潜む日常のハラスメントと性差別、そしてその対処法』かもがわ出版。

生きのびるためのジェンダースタディ（寄藤）

ベル・フックス，堀田碧訳，2003，『フェミニズムはみんなのもの－情熱の政治学』
新水社.

ベル・フックス，里見実ほか訳，2006，『とびこえよ、その囲いを－自由の実践とし
てのフェミニズム教育』新水社.

ベル・フックス，野崎佐和ほか訳，2017，『ベルフックスのフェミニズム理論－周辺
から中心へ』あけび書房.

本講義の実現にご協力いただいたすべての皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。